

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第55号

発行日 2019年4月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2019年度 差別の歴史を考える連続講座

第1回 「中世被差別民の集団をめぐって」（仮）

日時：6月14日（金） 13時30分～15時30分

講師：川嶋 将生さん（立命館大学名誉教授）

キーワード：南北朝時代～安土桃山時代・東山山荘・河原者・散所・声聞師  
集団・花押・官途名・襲名

第2回 「京都・キリスト教・マイノリティー戦国から現代へ」

日時：6月28日（金） 18時30分～20時30分

講師：麻生 将さん（同志社大学人文科学研究所嘱託研究員）

要旨：戦国時代、近代、現代の京都のキリスト教とマイノリティーの関りに  
ついて見ていく

場所：京都府部落解放センター会議室 参加費：無料

第1回のみ13時30分開会です。ご注意ください

参加ご希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールでご連絡ください

～第3回以降のお知らせ～

第3回 10月4日（金）竹中友里代さん（京都府立大学）

「近世石清水八幡宮の菖蒲革と神人の活動」

第4回 10月11日（金）上杉聰さん（大阪市立大学元教授）

「賤民廃止令について横山百合子氏の疑問に答える」

第5回 10月25日（金）吉住恭子さん（京都市歴史資料館館員）

「江戸時代の清水寺に存在した「仁王門下の惣門」と門番  
—『成就院日記』を中心に—」

第6回 11月1日（金）梶居佳広さん（立命館大学社会システム研究所客員研究員）

「日本国憲法制定期の新聞論説（1945～1947年）」

開会時間は18時30分です

## 本の紹介

姜善奉詩集

## 『小鹿島の松籟』

(川口祥子訳・上野都監修)

中島 智枝子

(ボツサムの舎)

一 ハンセン病について  
本書の紹介に入る前に簡単にハンセン病について説明しておきたい。

ハンセン病であるが古今東西を問わず長い間「不治の病」として恐れられてきた病気であった。一八七三年、ノルウエーのアルマウエル ハンセンにより「らい菌」が発見され、その後、第二次世界大戦下の一九四三年アメリカで特效薬が開発されて以来「治る病気」となった。

第二次世界大戦後、ハンセン病をめぐる施策について見直されることとなり、一九五六年、ローマに五一か国二五〇名の代表が集まり、「ライ患者の救済と社会復帰のための国際会議」が開かれ、新薬により治療が可能になった、差別待遇的諸法律は撤廃されるべきであ

る、強制隔離はハンセン病に対して偏見や差別を強める以外の何物でもない」と決議されている。日本ではこのような国際的な潮流に対して、一九五三年に「らい予防法」が新たに制定され、戦前からの強制隔離策が引き続き採られた。

「らい予防法」が廃止されたのは一九九六年四月のことである。同法には退所の規定がなくその間多くのハンセン病の人々は完治したにもかかわらず全国に一三か所ある国立療養所、二か所の私立の療養所での生活を余儀なくされた。

ハンセン病について近代に入ってから朝鮮半島でどのような施策が採られていたか簡単に見ておこう。日本統治下、日本国内で施行された強制隔離を謳った「癩予防法」(一九三一年制定)に準拠した「朝鮮癩予防令」が一九三五年

四月に施行された。同令によりハンセン病に対する総督府の管理と強制隔離政策は一段と強化されることとなった。島の形が子鹿に似ている所から小鹿島と呼ばれた島にあった道立の療養所は前年の一九三四年に国立癩療養所小鹿島更生園となった。小鹿島の広さは岡山県にある長島よりやや広い。療養所が置かれた小鹿島へは日本国内の療養所多くと同様、船で渡って行くしか交通手段はなかった。現在では小鹿島に行くのにはバスの終点の鹿洞から橋が架かっており自動車で行くことが出来るようになってきている。橋が架けられたのは二〇〇九年のことである。

一九四五年八月一五日に植民地支配から解放された以後のハンセン病に対する動向であるが、韓国では日本とは異なる歩みをたどった。解放後小鹿島を出る人々もあり、また「集団部落運動(希望村運動)」が始まった。全国で一六の自活村が設立されたが、一九五〇年から始まった三年に及ぶ朝鮮戦争ですべて雲散してしまったということがある。一九五四年に「朝鮮癩予防令」が廃止され、新

たに「伝染病予防法」が制定されハンセン病は結核並びに性病と共に第三種の性病と位置づけられた。韓国でもまだこの時は隔離收容の制度は廃止されず、小鹿島から出て暮らしていた自治集落「定着村」は隔離收容施設の一つとみなされた。一九六三年、伝染病予防法が改正され強制隔離策が廃止された。韓国での施策について簡単に触れたのは姜善奉さんの詩がどのような中で作詩されたのかを理解するうえで重要と考えたからである。以上は本詩集の訳者による解説の要約なので詳しくは巻末の「解説 小鹿島について」に当たってほしい。

ここで紹介する『小鹿島の松籟』は韓国の姜善奉さんの詩集である。姜善奉さんは戦前日本が設立した小鹿島ハンセン病療養所に現在住んでいる「ハンセン人」である。韓国ではハンセン病に罹った人、またはハンセン病に罹ったが完治した人を合わせて「ハンセン人(びと)」と呼んでいる。

## 二 第一部

本詩集の構成は序詩そして第一

部から第五部の五つの時期に区分され各部にそれぞれ「自序」が付けられ姜善奉さんの歩みが記され、その時期のことを詠んだ詩が収められている。各部に付けられた「自序」が詩の理解を深めてくれるものとなっている。

姜善奉さんは一九三九年に韓国慶尚南道晋州に生まれた。姜善奉さんが生まれた頃は総督府のハンセン病に対する管理が一段と強化された時期であった。そして、未感染児童だった姜善奉さんが発病したのは解放後の混乱した時期であった。

第一部は「自序Ⅰ」によると「私は運命に宿命が重なり生まれてきた。ハンセン人の母、その人生行路が私の人生の道となり、蔑視と冷遇の苦痛のなかに流浪の者としてさまよいながら、飢えと季節の過酷さにただ涙する人生であった。果てもないこの行路を、歳月に背を押されて、かように生きてきた」とある。「八歳の私は、隔離収容の道に連れていかれる母の手をしっかりと握り、小鹿島に第一歩を踏み入れた。保育園の悪夢のなかでも、幼い私はオオバコの

ように生き残り、希望を夢見ていた」と書かれている。父親がハンセン病で亡くなりハンセン人の母親と共に一人息子の姜善奉さんは、一九四六年に小鹿島のハンセン病療養所に入った。ところがハンセン病に罹っていなかった姜善奉さんを待っていたのは母親との別離である。母親の住む住居ではなく、未感染児童の収容所に入れられ、子供は月に一回の親との面会が許されるだけであった。

その頃のことを読んだ詩がある。「愁嘆場（スタンジャン）」という詩である。注によると愁嘆場（スタンジャン）とは病舎地域と職員地域を分ける境界線道路の両端に親と子供を一定の距離を保って立たせ月に一回の面会をさせた。親子の面会は目と目を交わすのみであったということだ。悲しい親子対面の場である。

小鹿島ハンセン病博物館にはその時の光景を映した写真が展示されている。松並木道の両側に、一列に大人と子供が並び、手を振り挙げて何か叫んでいるような光景の写真である。母親ならば我が子を抱きしめ、元氣かと声もかけた

い、子供は子供で親に甘えたかっただろう。それもできない面会である。親子の月一回の面会もこのような形でしか許さなかつた療養所側のやり方はなんとも残酷なやり方である。その時のことを謳った詩が「愁嘆場」だ。

#### 「愁嘆場」

母の胸から引き離された子ら  
上級生と教師の暴力と脅しに  
骨身に刻み込まれる傷跡  
こらえた涙は小さな水溜まりとなり  
身を振り 母の乳首を探し求める。

時が限られた母とこの出会い  
「ひもじいだろうね……」問う  
母の言葉に  
言っではいけない教えを忘れ  
思わず言った「うん」のひとこと  
咎として食らった山盛りの汁飯  
で死線をさまよう  
泥まみれの梅檀の実を飴玉に  
腐った豆の香ばしさに盗み食いし

罰で北風すさぶ雪庭で両手をあげて立たされ 眠りに勝てず  
目が覚めると凍傷にかかっていた。

その姿を見た母は  
張り裂ける胸を抱いていつまでも  
も哭き叫ぶ。 (一九ページ)

※引用にあたりルビは省略。以下同様

未感染児童として始まった姜善奉さんの小鹿島での生活であったが、体罰で一晩中外に立たされた結果、凍傷になりやがて自身もハンセン病に罹る。一三歳の時である。

一カ月ばかり母との共同生活。やがて、引き離され男子部独身部屋に移される。

#### 三 第二部

ハンセン病に罹りやがてDDSの治療薬で完治した姜善奉さんは「自序Ⅱ」では「その後の時間は、継続する隔離収容の悪夢を克服していく悲しみの旅路であった」時期であった。

当時の小鹿島療養所を謳った詩である。

「小鹿の松風」

風の通り道 うら寂しい島  
腰に傷跡の筋をつけた松の木  
三十六年 屈辱の証の代償だ  
春 夏 秋 冬  
おまえだけのその声

強制収容に泣き叫ぶハンセン人  
変形した姿のあちこちに刻まれ  
た

強制労働の苦痛、  
自由を失った祖国への郷愁

春 夏 秋 冬  
おまえだけのその声

松風に 聞こえるよ。

※注によると「日帝時代、松炭油  
を採取するために松の木に傷をつ  
けたその傷跡。」(二五ページ)

「DDS1」、「DDS2」の  
詩は治療薬DDSによりハンセン  
病が皮膚の病変もなく治り、蔑視、  
冷遇、隔離がなくなり偏見がなく  
なり自由が築かれると謳っている。

「人として」

みんなは私に人になれと言うん  
だよ

私はそう出来ないんだな

人として生まれてきたのに 人

になれと言うんだから

どうしろと

ハンセン病の仮面をかぶったか

ら

私の姿が隠されたんだね

治療薬が病の仮面を溶かしたけ

れど

今は病気の痕跡が仮面になるん

だね

そんなふうには歳月の奴隷として

生きてゆくこと、

それが 私か

人として生きてゆく道なのだね。

(三七ページ)

ハンセン病から完治したものの  
ハンセン病が姜善奉さんの心に残  
した傷跡には深いものがあること  
がわかる。

四 第三部

第三部は闘病の傍ら小鹿島にあ  
る小学校に進学。さらに中学校。  
そして小鹿島での最高教育機関で  
ある医学講習所課程に進み、大き  
く成長していった時期の思いが詠  
まれた詩が収められている。

「進学」

生まれながらに苦痛を負った

か弱い新芽

骨を刺し 突く疼痛

アスピリンの力を借りながら

小学校を卒業できた喜び

痛みさえも幸せだったほど。

坊主頭になり未来の夢に向かい

中学校に進学した日

苦い苦い海浮散<sup>\*</sup>を飲むわけでも

ないのに

声をあげ わっと泣いたその時

が無垢な追憶として次々に浮かび

くる。

※注によると「海浮散とは皮膚化

膿症の薬」(四七ページ)

第三部には療養所で知り合った  
人々との交わり、亡くなった人へ  
の思いを謳った詩が収められてい  
る。「夢の話」、「小鹿島の松林」、

「月夜に」、そして「亡き者との

別れ」の詩等がある。これらの詩

を通して姜善奉さん達が生活した

小鹿島の世界がどのようなもので

あったかを知ることが出来るだろ

う。

五 第四部

第四部は小鹿島を出て自活を始  
めた時期である。「自序IV」には  
「鹿山医学講習所を修了後、同病  
の患者を治療していたが、五馬島  
干拓場へ脱出した。そして社会人  
として生きてゆくために苦闘して  
いた頃のことを思い出してみる」  
とある。

五馬島の干拓とは注によると一  
九六二年から趙昌源小鹿島病院長  
指揮のもとハンセン病回復者たち  
が自分たちの定着村を作るために  
高興郡五馬島に干拓場を作ろうと  
した。ところが住民の反対に会い、  
一九六四年には全羅南道に事業が  
移り、完成後はハンセン病回復者  
の土地にならなかったということ  
である。

ここに収められている詩には姜  
善奉さんの自活のための苦闘が詠  
まれていた。

「小鹿島から出たものの、故郷

もなく家族親戚もないので、生

きてゆく日々は茫然たるものでし

た。生きるために谷間の者の遺産

である物乞いに半年ほど通いまし

た」(エピソードより)とあることからも、自活の道はなかなか厳しいものがあつたようだ。

「谷間の者」とあるのは、韓国ではハンセン病に罹った者は、家族から捨てられ流浪乞食をして行く当てのない者同士が人里離れた谷間、共同墓地の傍らや荒れ地のような所に掘つ建て小屋を作り寄り集まって生活した。お互いに自分たちのことを「コクサンイ」と呼んだという。「コクサン」は漢字では「谷山」であり、「イ」は人・物を表す名詞で「者」ということで「谷間の者」ということである。姜善奉さんは自身の号を「谷山」とし、また自身の著書の題にも『谷山の忍冬草の愛』と使っているように、「谷山」には、差別に対する怒りと共にそれに負けないという思いを込めた言葉であるようだ。

「乞食に青柿」、「歳月の痕跡、小鹿島」、「永遠に お前と私とともに」、「小鹿島連絡橋」等。どれ一つとっても、姜善奉さんの体験の中から生まれた詩である。是非とも読んでいただきたい詩である。

一九六七年、姜善奉さんは済州島に渡り、鹿山医学講習所修了の経歴と小鹿島での医療の経験から無許可医療行為で生活を続けたということだ。やがて知人の紹介で道立病院に就職できたということだ。その後、放射線技師免許を取得し病院の仕事を一生懸命に続けられた。

六 第五部

第五部の「自序V」は「トンネルのような暮らしを抜けるや訪れた直腸癌を克服し、新しい世界を求めて旅に出た。新たに与えられた人生に感謝し、希望を求めて発つた旅先での感慨を著してみる」とある。本詩集に収められている詩は第五部が最も多い。  
姜善奉さんの海外旅行に託した思いを詩の一部からみてみよう。

生きることにあくせく わけもなく辛い日々を忘れよう  
重荷をほうり出しヨーロッパへ  
体と心も中空に飛んでいる  
窓の外の銀河に 夢も悲嘆も歳月も流してしまおう (「ヨーロッパへ」七九ページ)

「まさに夢のヨーロッパの地」  
（「パリにて」八〇ページ）というものであった。

標高三三三八メートルのテイトリス山では「世界最初の回転するケーブルカー」とハングルで刻まれていることに感激しその回転するケーブルカーに乗り登っていく。

頂上三三三八メートル 息が苦しい  
八月に雪がちらちら スキーを  
楽しむ姿が羨ましい

氷の洞窟を過ぎて深呼吸すると  
アルプス山脈、ひとつの頂上を  
登っていくのだな  
夢のようなできごと！ (「テイ  
トリス 雪山三三三八メートル」  
八四ページ)

と謳う。

第五部に収められている姜善奉さんの詩全体の印象はそれまでの詩と異なり、目に触れるものすべてが新鮮に映りそのことを謳った詩であるように思えた。そのような詩の中の一つにポルトガルで見  
たコルクの木を謳った詩がある。

太い木の腰が剥かれて  
赤い肉をむき出して続く コルクの木の群生

治療も受けられず 風に 埃に  
どれほどひりひりと痛むことか  
風に震えている葉群れ  
2 ひたすら 自然治癒だけだね  
その苦痛が何年ごとに繰り返すとか  
痛みも続くだろうになあ。  
（「コルクの木の悲しみ」九二ページ）。

コルクを取るために表皮を削られた木をみて「治療も受けられず風に 埃に／＼どれほどひりひりと痛むことか」と感じるところは姜善奉さん自身の病気の体験が反映されているように私には思えた。

姜善奉さんの旅はヨーロッパをはじめ世界の各地におよぶ。朝鮮民族にとつての聖地と言われている白頭山へは中国から登っている。さらに、モロッコ、オーストラリア、ニュージーランドそして韓国内の各地を巡る。白頭山では

六・二五の時 昼も夜も覚えさせられた

「長白山の峰々を——」その歌を思い出す。（「長白瀑布」八七ページ）

と。「六・二五の時」とは、朝鮮戦争をさす。訳者の注によると小鹿島療養所は朝鮮戦争中、北の人民軍に占領され食糧問題が深刻化したということだ。歌は「金日成将軍の歌」であり、北の人民軍は占領した各地域で強制的に住民たちに教えたということだ。

「追憶」という詩では

一九六三年秋 落ち葉につれ  
小荷物を下げ

雙溪寺の向かい側 藁屋根の村へ

厳冬雪寒 連れもなく あるのは沈黙と寂寞ばかり

満開の婚礼のトンネル 桜の花は

雙溪寺の溪谷を白い霞で覆った  
二十代 流浪の偽医者  
の悲哀を抱き

私の門出が桜の花とともに 埋められているその場所

二〇〇六年 四十余年が流れ  
梅の実が熟すころ

孫の手を握り また来たよ

溪谷の岩 雙溪寺石門 七仏庵

溪谷

仏日の滝 水音はそのままだが  
流れる水は 昔の水にあらざ  
世の波に乗せられ 流れ流れ  
さ迷って

今は年輪ばかりが増え

白髪はほつれ乱れるのか。

（一〇一ページ）

この詩は小鹿島を出て自活の生活を始めた地を四〇余年後再び訪れた時の詩である。あつという間の四〇余年だったのか、それとも長かったなあという思いなのか、ともあれ「今は年輪ばかりが増え／白髪はほつれ乱れるのか」、姜善奉さんが老いを感じたことが謳われている。海外旅行を楽しまれるようになるのに約半世紀に及ぶハンセン人としての苦悩に満ちた人生があったことを第五部に収められている詩を通してうかがい知ることが出来る。

むすび

両親ともハンセン人という姜善奉さんの人生はハンセン病と共にあった人生と言つても過言ではない。ハンセン病で父を失い、ハンセン病の母と共に小鹿島の療養所に入り、やがては発病、苦しい闘病を経て回復された。その後、小鹿島から出て自活の道を歩まれた姜善奉さんは、現在、再び小鹿島に帰られている。

二〇〇六年には『小鹿島 賤国への旅』を著され、次いで、二〇一六年には本詩集、および小説『谷山の忍冬草の愛』を出されるなど、ハンセン人の人権回復と小鹿島の過去と現在を広く社会に問う活動をされている。

両親ともハンセン人、自身もハンセン病にかかり今は完治したものの、ハンセン病を背負い生きるということがいかに過酷なものであったかということ強く感じさせられた。また、日本の植民地統治下で実施された強制隔離政策や夫婦の患者には断種を条件に同居を許可するという施策が韓国のハンセン人に与えた影響の根深さを知ることが出来た。

戦後は日本よりも早くに隔離政策が廃止され、定着村事業が推進されたが、当初の近隣住民との葛藤や子ども就学問題、さらに近年は回復者の高齢化による生活維持のむずかしさ等の問題があるということだ。

ハンセン病に対する偏見や差別をなくしていくためにも、ハンセン病ゆえに過酷な人生を歩んでこられた姜善奉さんの書物や本詩集から学ぶことは多いと言えるだろう。本詩集の原題は『谷山の松風の音』であるが、著者の了解のもと、『小鹿島の松籟』と改め刊行された。

本詩集の他にも姜善奉さんが著された『小鹿島 賤国への旅』はじめ小説『谷山の忍冬草の愛』が一日も早く翻訳され、紹介されることを願わずにはおれない。

（二〇一八年一月二〇日、解放出版社、二二〇〇円）

- (古地図) 所蔵機関における保存・展示・研究 小野田 一幸, 廣岡浄進, 吉村智博/インタビュー 正確な歴史のために絵図(古地図)の活用を 浅居明彦 聞き手: 吉村智博
- 本の紹介 青木美希『地図から消される街—3.11後の「言っではいけない真実」』 神林毅彦
- ハンセン病問題と市民の責任 「外島保養院の歴史をのこす会」の活動から 矢野治世美
- 部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 30 第3部 ハブリの世界 第7章 神人と部落共同体 川元祥一
- 部落解放 771** (解放出版社刊, 2019.3) : 1,000円  
部落解放研究第52回全国集会報告書
- 部落解放 772** (解放出版社刊, 2019.4) : 600円  
特集 多様な性がともに生きる社会へ  
本の紹介 朝治武『水平社論争の群像』 友永健三
- 部落解放研究 25** (広島部落解放研究所刊, 2019.1)  
県連再建五十年を省みて—私と部落と解放と— 小森龍邦
- 欧米人研究者の部落問題研究とオリエンタリズム—アウトカーストと被差別部落— 小早川明良
- 生活改善活動と農村女性の地位変容 坂本真司
- 軍都臣民の精神構造—近代金沢の象嵌職人を事例として— 青木秀男
- 朝鮮人「満洲」移民の移住動態と「安全農村」 朴仁哲  
祝われる原爆開発・消費される被ばく体験 宮本ゆき
- ヨーロッパにおける移民排除と安全保障・軍事化政策—2015年・2016年におけるスロベニアの難民問題を事例として— アレス・ブカー・ラクマン
- 部落解放研究 209** (部落解放・人権研究所刊, 2018.11) : 2,000円  
特集 部落差別解消推進法の具体化に向けて  
今日の差別事件の特徴と傾向及び背景と課題 北口末広/ネット社会と部落差別の現実 川口泰司/インターネット上の部落差別と解決に向けた政策提言に向けて 松村元樹/部落差別解消に向けた自治体の取組—「自治体における同和行政に関するアンケート」の結果より 棚田洋平/部落差別を把握するための意識調査の課題 内田龍史
- 続・朝鮮衡平運動史研究発展のために—全羅南道及び慶尚南道での踏査— 割石忠典
- 韓国ドラマに描かれた「白丁」と衡平社 朝治武
- 部落解放研究くまもと 77** (熊本県部落解放研究会刊, 2019.3)
- 特集 第37回九州地区部落解放史研究集会報告  
太鼓の履歴書—太鼓胴内墨書銘の収集と分析 服部英雄/天草の被差別民 矢野治世美/「肥州長崎図」のネット公開について 阿南重幸
- 藤崎宮祭礼「ボシタ」呼称を考える会記念講演 被差別部落女性の主体性と複合差別 熊本理抄
- 部落解放ひろしま 101** (部落解放同盟広島県連合会刊, 2019.1) : 1,000円  
特集 県連再建50年の歩み
- 部落問題研究 227** (部落問題研究所刊, 2018.12) : 1,058円  
近世における移動・行き倒れの構造(試論)—播州・林田藩領の事例から— 藤本清二郎
- 近現代日本の連帯と救済の歴史にみる生存と国家・社会—命と生存の格差が容認される現代社会の形成過程とその構造的課題— 大杉由香
- 摂津国神戸村における「行き倒れ」 石橋知之
- 近世柏原宿における行倒人処理—近世宿駅支配構造理解の一助として— 松浦智博
- リベラシオン 172** (福岡県人権研究所刊, 2018.12) : 1,000円  
特集 上杉佐一郎生誕100周年・IMADR30周年・世界人権宣言70周年  
前近代皮革業の構造 1—2000~18年の動向を整理するのびしょうじ  
図書紹介 安蘇龍生著『筑豊—石炭と人々の生活—』 小正路淑泰
- 小学校での部落史学習の現状と取り組みの方向 3—取組の方向2— 迫本幸二
- リベラシオン 173** (福岡県人権研究所刊, 2019.3) : 1,000円  
特集 LGB T Q教育は今  
前近代皮革業の構造 2—2000年代以降の皮革史の動向と文献・論文— のびしょうじ  
書評 服部英雄編著『太鼓の履歴書・胴内銘文報告』のびしょうじ
- 小学校での部落史学習の現状と取り組みの方向 4 迫本幸二
- 民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 34 「ひえもんとり」の周辺 1 石瀧豊美

- じんけん ぶんか まちづくり 62** (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2019. 1)  
巻頭コラム なぜ今、「人権まちづくりセンター」を「人権平和センター」にするのか? 佐佐木寛治
- 振興会通信 144** (同和教育振興会刊, 2019. 1)  
「経典から学ぶ差別の現実について」—その経緯とねらい 1 小笠原正仁  
同朋運動史の窓 50 左右田昌幸
- 信州農村開発史研究所報 146** (信州農村開発史研究所刊, 2018. 12)  
「被為 仰付」の読み下し方 斎藤洋一
- 信州農村開発史研究所報 147** (信州農村開発史研究所刊, 2019. 3)  
八重原村の被差別部落の歴史 6 柳沢恵治  
五郎兵衛用水の「田楽積み」について 斎藤洋一
- 崇仁～ひと・まち・れきし～ 7** (崇仁発信実行委員会刊, 2019. 3)  
識字学級との出会い 古川洋平
- 月刊スティグマ 270** (千葉県人権センター刊, 2019. 1) : 500円  
千葉県の部落史を歩く 6 『勝扇子』事件について 2 坂井康人
- 月刊スティグマ 271** (千葉県人権センター刊, 2019. 2) : 500円  
特集 「明治維新150年を考える」この国の形と差別の原因を考える  
明治維新後遺症としての日本人…差別問題をすべての人のものにするための試論 鎌田行平  
千葉県の部落史を歩く 7 『勝扇子』事件について 2 坂井康人
- 月刊地域と人権 418** (全国地域人権運動総連合刊, 2019. 2)  
特集 第14回地域人権問題全国研究集会  
「部落差別」とは何か、そして「結婚差別」とは 奥山峰夫
- であい 681** (全国人権教育研究協議会刊, 2018. 12) : 160円  
人権文化を拓く 253 原点は現場にあり 中田ひとみ
- であい 682** (全国人権教育研究協議会刊, 2019. 1) : 160円  
人権文化を拓く 254 21世紀の「人権」を切り拓いていくために 佐藤慧
- であい 683** (全国人権教育研究協議会刊, 2019. 2) : 160円  
人権文化を拓く 255 体験的「人権教育・啓発」論—自分史を振り返りながら 藤田敬一
- 日本史研究 675** (日本史研究会刊, 2018. 11) : 900円  
書評 町田祐一著『近代都市の下層社会—東京の職業紹介所をめぐる人々—』 布川弘
- 日本史研究 678** (日本史研究会刊, 2019. 2) : 900円  
京都における地域史研究の課題—今村家文書調査の歩みを手がかりに— 小林丈広
- ヒューマンJournal 227** (自由同和会中央本部刊, 2018. 12) : 500円  
部落解放運動40年を振り返って 30 部落解放に反天皇制は無用 10 灘本昌久
- ヒューマンライツ 370** (部落解放・人権研究所刊, 2019. 1) : 500円  
特集 インターネットと部落差別  
報告 大賀正行 連続講座 第3回・第4回
- ヒューマンライツ 371** (部落解放・人権研究所刊, 2019. 2) : 500円  
特集 「インクルーシブ教育」と「特別支援教育」  
報告 大賀正行 連続講座 第五回 講座内容をふまえた「遺言」
- ヒューマンライツ 372** (部落解放・人権研究所刊, 2019. 3) : 500円  
特集 外国人労働者受け入れと共生社会  
書評 朝治武, 谷元昭信, 寺木伸明, 友永健三共編著『部落解放論の最前線—多角的な視点からの展開』 廣岡浄進
- 部落解放 768** (解放出版社刊, 2019. 1) : 1,000円  
第49回部落解放・人権夏期講座報告書
- 部落解放 769** (解放出版社刊, 2019. 2) : 600円  
特集 東京都人権条例を問う  
高等教育機関における同和・人権教育の過去・現在とその課題 板山勝樹  
部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 29 第3部 ハフリの世界 第6章 犬神人=「坂非人」 川元祥一
- 部落解放 770** (解放出版社刊, 2019. 3) : 600円  
特集 絵図(古地図)をめぐる資料所蔵機関の課題  
絵図(古地図)の公開推進と研究深化の可能性 吉村智博/近世刊行大坂図の「非人村」記載の削除 四ヶ所の嘆願と絵図改変のありさま 小野田一幸/座談会 絵図

皮革関連統計資料

**紀州経済史文化史研究所紀要 39** (和歌山大学紀州経済史文化史研究所刊, 2018. 12)

紀州藩における旅人病人継ぎ送り政策の展開 藤本清二郎

**教化研究 163** (真宗大谷派教学研究所刊, 2019. 1) : 1, 500円

特集 「近代教学」再考(下) —現代への波紋と課題  
真宗同和問題研究会の歴史的意義—木越樹氏の聞き取りを通して— 鶴見晃

**京都市歴史資料館紀要 28** (京都市歴史資料館刊, 2018. 6)

鴨川・高瀬川地域の歴史遺産継承・活用事業 「シンポジウム 今村家文書の魅力」の記録

講演1 領主様はお寺さん? —寺院領大仏柳原庄の近世  
梅田千尋/講演2 奔走する今村忠次—明治維新と地域の再編  
井岡康時/パネルディスカッション 梅田千尋・井岡康時・小林丈広

**京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信 28** (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2019. 1)

崇仁と東九条 前川修

崇仁の歴史(前編) 前川修

東九条マダンによせて 藤尾まさよ

**京都民俗 36** (京都民俗学会刊, 2018. 11)

祇園祭神輿渡御の担い手の変遷—近代・「四若」を中心として— 中西仁

**グローブ 96** (世界人権問題研究センター刊, 2019. 1)

「今村家文書」の研究と、地域の歴史遺産継承の課題  
秋元せき

**芸備近現代史研究 3** (芸備近現代史研究会刊, 2019. 1)

生命財産をまもる、福山藩の砂留—神辺地域を中心に—  
佐藤一夫

警察官僚 丸山鶴吉略伝 田中英夫

朝鮮衡平社大会に参加した原口幸—植民地期朝鮮と広島県北部の部落差別撤廃闘争— 割石忠典

写真に見る近現代史 1 松永の下駄工場

家庭児童相談室制度54年—全国家庭相談員連絡協議会が結成47年にて終焉— 香渡清則

部落差別と闘う高校生群像—1970年代という新しい時代の幕開け 藤本誠二

広島への「是正指導」は何を破壊したか—公教育におけ

る「中立性」の問題についての一考察— 池田賢市

女性支援の未来に向けて—DV問題にかかわる「婦人相談員」として— 藍野美佳

書評 部落解放同盟広島県連合会高西支部編『闘いの灯をともし続けて 高西支部70年の歩み—1948年~2018年—』 今岡順二

史料紹介 永代記録 案原山教明寺

**国際人権ひろば 143** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2019. 1) : 350円

特集 ビジネスと人権をめぐる国内外の動向

**国際人権ひろば 144** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2019. 3) : 350円

特集 世界人権宣言誕生から70年

**人権と部落問題 919** (部落問題研究所刊, 2019. 1) : 600円

特集 「働き方改革」と労働者の人権

文芸の散歩道 古壺に好かれた乞食—『中陵漫録』より— 小原亨

ごった煮人生をふり返って 9 母・千代子の周辺 成澤榮壽

**人権と部落問題 920** (部落問題研究所刊, 2019. 2) : 600円

特集 民族教育の権利—在日コリアンの現在

文芸の散歩道 井上光晴著『ガダルカナル戦詩集』—戦時下で自己矛盾に苦悶する人間模様 桑原律

ごった煮人生をふり返って 10 父の中央融和事業協会勤務 成澤榮壽

**人権と部落問題 921** (部落問題研究所刊, 2019. 3) : 600円

特集 日本の「人権問題」対策を問う

障害者雇用「水増し」問題と障害者対策 赤松英知/「ヘイトスピーチ解消法」をめぐる動向と課題 神原元

「部落差別解消法」に係わる問題点—「意識調査」の実施と条例制定をめぐる— 新井直樹/多様な性の平等参画と社会的課題としての性的指向、性自認、性表現— 国立市の条例にふれて— 原ミナ汰/「優生保護法」と人権のこれから 市野川容孝

文芸の散歩道 山田清三郎作『地上に待つもの』—大阪の米騒動を記録した長編小説— 秦重雄

ごった煮人生をふり返って 11 父の国民精神総動員中央連盟・大政翼賛会時代 成澤榮壽

2018年度『人権と部落問題』総目次 (910号~921号)

# 収集逐次刊行物目次 (2019年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 明日を拓く 118** (東日本部落解放研究所刊, 2018.12) : 1,080円  
 特集 石田貞さんを偲ぶ
- IMADR通信 197** (反差別国際運動刊, 2019.2)  
 特集 外国人労働者と移民社会
- ウィングスキょうと 150** (京都市男女共同参画推進協会刊, 2019.2)  
 図書情報室新刊案内  
 小川たまか著『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話を』/レベッカ・ソルニット著『説教したがる男たち』
- 大阪大谷大学紀要 53** (大阪大谷大学刊, 2019.2)  
 近代京都の土木工事と朝鮮人労働者—錦林地区を中心に— 高野昭雄
- 大阪大谷大学教育研究 43** (大阪大谷大学教育学会刊, 2017.12)  
 京都市の被差別部落と在日朝鮮人—西陣織をめぐって— 高野昭雄
- 解放研究とっとり 研究紀要 21** (鳥取県人権文化センター刊, 2019.3)  
 部落差別解消推進法をどう活用するのか～実効ある施策に繋がる実態調査を～ 新井宏則  
 鳥取藩の部落史と人形芝居 坂本敬司  
 障がい者の就労と共に生きる社会をめざして 西嶋利彦
- 解放新聞 2900** (解放新聞社刊, 2019.3.25) : 90円  
 本の紹介 朝治武著『水平社論争の群像』 谷元昭信
- 解放新聞京都版 1146** (解放新聞社京都支局刊, 2019.3.20) : 70円  
 本の紹介 太田垣章子著『家賃滞納という貧困』
- 架橋 40** (鳥取市人権情報センター刊, 2019.2)  
 特集 「優生思想」を考える  
 高校生への聞き取り調査を実施して 衣笠尚貴  
 みんなの架橋～架橋でめぐる全国の人権機関～ 手をつないでほしいねん 部落差別をはじめあらゆる差別をなくすために 堺市立舩松人権歴史館 大原和子
- 語る・かたる・トーク 286** (横浜国際人権センター刊, 2018.12) : 550円  
 語る・かたる・エッセイ 中高生とともに差別と闘う「交流してこそ」 吉成タダシ
- 語る・かたる・トーク 287** (横浜国際人権センター刊, 2019.1) : 550円  
 語る・かたる・エッセイ 中高生とともに差別と闘う「着地点・通過点」 吉成タダシ
- 語る・かたる・トーク 288** (横浜国際人権センター刊, 2019.2) : 550円  
 語る・かたる・エッセイ 中高生とともに差別と闘う「楽しみと不安のお正月」 吉成タダシ
- 語る・かたる・トーク 289** (横浜国際人権センター刊, 2019.3) : 550円  
 語る・かたる・エッセイ 中高生とともに差別と闘う「新年会」 吉成タダシ
- かわとはきもの 186** (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2018.12)  
 靴の歴史散歩 131 稲川實

## 事務局よりお知らせ

- ◇編集部による記載の誤りのため、前号(54号)の下記の箇所を次のご訂正ください。  
 2頁2段目11行目「この「抽出学級」は民族学級と通称され」→「その後、形態は変わりつつ」
- ◇今年度の連続講座の日程が決まりました。ふるってご参加ください！なお、開始時間が第1回目だけ午後1時30分になっています。ご注意ください。
- ◇昨年度の連続講座の講演録ができました。ご希望の方は下記までご連絡ください。

- 所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階
- TEL/FAX 075-415-1032
- URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>
- 開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)
- 交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分